茶石心得 全

ヲ多5
647

門 ヲ多9 號 647 巻

一 衣裳乃事何やうにてもあるへし其の
人々相応なるを用へし夏ハ帷子
肩衣もよし上下ちやくしてもくるし
からす候

一 帷子ハ風呂乃時ハ能ハ三四ツ程ハ子く
呂のあとさしかへ小袖の時ハかまいて
さして上ニ帷子を着候ハ能ハ

一 ふくさゝはきところニ持て帰るへし
其手細を茶碗を持時ふくさにていたり
又ハ茶杓を茶碗へ渡しつゝハ茶入を
ふくさへ入るゝなり茶杓て中ぬ時ハ
亭主へかりてもよし
一 御茶てやゝを拭いて西方にて方より茶碗
やものゝしむりしも七日以前ニ茶碗やびらくに

一 以上亭主の茶持様肝要なり
一 後炭之半瓶如斯ニる和膳丸ゟ炉の
中へうつし灰の灰のかたよりつかりつ
すへしむ灰ふも中へうつし炭箸にて
はみりたくさん灰のまりしり掛へ
ちりふやはやうに炭ののけ湯をおしつ
あけくるおうさにて立りつしきれい

ふちへし白紙にて柄杓を遣らるへし
かきたりはさらり三段おくへし　銚
子あはしは嫁より手水を渡すへし　柄
杓もおなしく銚子酒取入の時は左の手より
の方にむきて加への銚子を置也　よしつれ
中立のおふに加への銚子持の手にて
かねいさらやに加への銚子へし　嫁はわ

ぬるく本にも石是も銚子のあと
おしるかよし
一　嫁御入の足義なとは
のけたるへしは渡しるやうにすへし
一　嫁当より時は左の傍掛に付のる
盃を前の数むとつるには又けさとも
口し申へからし盃の式定まりは

掛にかゝりたる所にすへし

一 朝夕の会にハ石燈籠に火を灯すへし
松とうし志ん細きを三筋なり 席の八ヶ
所に灯すへし 燭に灯しらへハ云なり 甚
しく悪し 月の夜も同し 庭会
にハ大きめとうしんを三筋立るなり
風ふきすさけ 障子をのけ置へし

一 池廻りをかけ一寸なり

一 雪隠めそつくひあらさをちりあるに此
上の釘に掛へし 紙燭をすへの上竹
戸角に立かけ置 燭の壺ゆかる
壺のうしろに立なりかく 壺へいも
うけやなり 蓋を戸をあけて置るも
あり 但せつゐんの戸のひまなり

一 白砂所ハ梅杉居据の事及ぶ飾と
ほるが飾ハ杉梅杉を用ひる飾りは
梅杉をふせて志も差に置が飾りハ
無くてふしやくの口を前へ見ゆるやうに
置なり又大きな横ふたるき飾りハ桧乃
ふさしくを無きつくハ置なり
一 白砂乃下茂石等の寸ちと違しるの

よしみつきりつるを見つよし
一 松葉の中きゆるの事下地を能く茂
をのけ枝葉を落しますくへし
居つるよる松葉をつみて取るのなり
但一日に二日までまてより
一 松葉さいに事能うちこさハ悪し 又
第さも悪し 松葉ちるまて 積斗ふ

めしろハ悪し たてふも置くよし
一 日和ならば晴にあてず さゝを
立るかよし
一 根葉乃上まてかゝりこよ 茂葉相生
を置るもよし
一 せきふを一足根葉の下ツ子の鉢ニ
立かけて置へし 雨ふり下りて傘
けさを置へし
一 暑ニ石にも木ならでもかわくまじく
水を打へし
一 夏ハ根葉鉢ニ盆をかくへし
すゞ竹水をうけて中竹るをうけ
一 根ヒくに掛へうは金席也
時ふうけへし

一　内乃御掛ニゐん床を或人の数一ツに
かさりて斤掛に無へし外の御掛
にも経疏阿けすい灌阿んこうを
無へし疏云ゟも阿んこうせしやかのこ
無用也御乃の斤掛に無へし
一　経のし云なくハ庶裁に本地の阿んとうを
無へし用も可書に阿りましも

無んしも戸をとめ一用障子ますへし
室を一用戸ふして両方ハ障子ふ
すへしあんとう云り掛らくては
阿しく候
一　疏云にも経祭するやに無へし
無用也可在に阿りましもんしも
是も志やうしにともありこをかもこふ

戸ふしてよし

一 釜の蓋なくハ夜の長き時ニ釜を数
客座ニ掛てしちかよりまへニ寄るく
ことも釜ハ釜にてかけしけれは時
釜ニかけるを肩より水湯のかゝりて
かけしろ七りより此を呼ちあるへけれと
なり庄出へかきて湯をかりふたへかへ

悪しくハにへさかりてかきつけにへ
かしらさらへ火をもとも大きなるき
しるなるよし

一 釜の蓋組置敷なとかけるに置
つゝい但湯のにへさるにかさたるを置
て炭の入る悪しにへ出かさるをゐ
置かけて置てよし

一 心胴の云うは出ぬきハ悪し 前
置よりも枝より除しまへうよし
此器にあつしくらき悪し
一 流枝より枝葉胴花の初を梅のほそきを
一 流さ扣けの上枝請けさる留を
つまり扣けさ垣にをき流さあけ
前中は流さ扣けかけるを渡るを

先しへ入て置そのふり流枝は
下段枝葉胴は初を見て八分ほど
流さ扣けるは節をそうさ節ふして
竹の間をそのまゝにして置よは座しさ
そうそうりちうの根へまてても流さ
扣けよは中立の流てなかうさすうう
一 流さあけよは色も出あうろいて中の

ほうほうはうさあけしの

一 親も兄弟たる事ありともおへちかひに
人を使ひする不及に音晩を言
より百右とてよし此時をさして約束
はかりむかひに人を之恩とも時
なるに相兼なくし思別言より
むかひに人を誘かりし仕を渡して川

親に兼なへし時に兄弟とは一入そ
公かちかたくし言を海のにあね
うるさ能志かんかんうへ右右
をやこそのかり、能々時に大おそくあり
ろいろ万ままあそこのをも不あかき兆して
あしく源あひも悪事あやしは火
焼しは時ならやくそくらいに夜来へ

入たる火を消 右捕縄は

一 妻を捕候の内に若気ぬかりのこと有

若し杖おもしろきゆへしるしおハ油断にて

おもひもし 深く以捕に気かりてこし實際

捕縄目付頼もしく気のつくものこと

一 若きもの一人にて捕縄 右衆 一進

き人をとらりて高手に居もいはがおこ居らり

捕縄と云ハ入てハ淀みつ中ゆく

言つ包もそこにて此しては あもを時ニ

使うけとて合を随へし

一 高手ろけて捕縄をも本ハ紫内して高手

のあふは随ふていく居へし高手網

一 居いはは等輩の人あらハ高手おし下ヶ

猪をして手中を捕く高手の廻りを

ぬらひはをかけて戸をたてゝ
其入居し其人なくハそとの外へ
出べし
一 あいさつの時盃をしてへしより
乃深めてきさゝをちゝへ入べし
西富まとらせまけに盃を出し
置かし紙へしのたて箱をかさらさへ

盃うけては盃乃ともしるけるをも給
盃をとりていたゞくべし
一 扇子の肉色には縫をあてがうを
所懸盤の上に置べし置所なき
ときは手に持なきさの方に置べしを
何もとおきても酒宴おきてもあん
ようを持給のへし右に持て置べし

数寄屋へ入時ハ刀掛にかけまいるへし
其の座にも持ハさる事にてハなく候
へし 刀ハ数寄屋なとによりて置よし
扨もかゝる時の刀へぬ事ありて右上に
置てもかしこまり候ハ無其座へ入りて
詰もうちへ入へし
一 此度ニ気を付けつゝかなうあんせい

かんの内石の事へゆうかの居ゆうとうん
て相役をかり座蔵へ上ゆうかう紙
見ておんとへし 此夜のふうさ時
相とせりかんの内をかんまてもうし
つゝ限ひ夜明て見ゆへきう相応
まとかんうまて見るへし
一 主人清浄の時ハあちうくなりせう

かんをあけてみるといふても不苦候
脇寄座へ入りても御詰みてある者
ともいつも見るけれ御次まりてみるさ
るもよし寒至まで御供乃時も
太のしるしとよろしく候
一 主人御供の時刀右の手に持せ脇指斗
ずして御次へ立てゐるよし主人の所望

御下時も刀掛より脇指の置所は
内縁座のかたつらに置へし
一 長老左手に置脇の主には右手におく
へし 脇そ法りの通よ
一 等年の人と同座して刀置（み）に置へし
相二言河の長さ 相に刀みし
り短相に脇指をみへし 山利

こしを上になして差べし うつむけ
脇のかたに差べし 但小刀指そうるに
あまたといふ人もあり
一 衣しきたるをさしくといふべし
物立かへりてせうそくとりてうつま
の下ぬきかくに立かけて差べし 次は
の紐けふも同し

一 竹の笠めさるゝ時にてうまの緒り
かうむていつまの笠もこもつきなき
垂なり
一 主人衣裳へかへりしか せうそくを取
て衣のえりにうつまの下に立かけて
垂しるかよしか 持かの せうそくを
片袖にふまへにつて 衣へいれなり

主人ありてせうさくをあそばし中事
悪し此ことばもおろく主人あり
給ふまじくぬ所よてハせうさくを遊して
かつ星根乃障子立かけて居りても
くるしからすハ
一 あの人ことばへ入 ちゃ席の内をかんかへ
かんやうを席の下ぬしるこの志ゆ中よ

居てまを隠さて能くへくし
行わさろうろ犬ぬめのこ此主人席
乃様よ思ひさりぬさへ其のおもよゆん
へしへんし御急かりますもした
西面りしへろくし居合
ありとも其相の御にようり御機嫌よ
ますてえつし御しへんし所にくくハ

又ちかいても小舌はいらかく節喜を
うかゝひよし
一 朝倉にて鯛の骨ゟ二つ系床の肉
らりゐハ懐子をはけて入るもよし
組魚ぬるものも一ツ入
一 鳥ざしの家にて右の手にて床
の肉をおしてうちて羊羹をはさみよくかけて

鴫中根の肉たつさいの肉をおくへし
鴫中をへんて時ゟとちを置てはけ
入へし たつさいの懐子もさはく
はけいぬやうにはけへし 此の
あ鴫中をへんて肉を床のうちを
へしは 又一番めハ床をへしうちて
仕込て下床を残るへし上床を床

又ハ隣次の人えうねやゆへに渡し
茶乃とく見仕廻し時一畳のうちへ
あを出へし　扨し日給仕席おのれて
何時もひけて置へし

一 或人云此茶をのり仕廻りを亭主ニ
咄して帛紗子にて寸法ゆ川をを持て
さし置とひけ掛之川そ此下のたゝみを

ふうをそうしへさしくとおけへし
戸帛子をきおけ或亭主衣は他
持入り掛内も席とも茶席こうゝ禮を
すへし　亭主も或人ゆえおしよ席へ
内ありらへうしまか席へうちてしハ
或ハ亭主へ先国へ内へ入りて下也く
そうしてやりて隣次乃縁をあゆ掛席の

一　内の書物をよんすへし
惣而物のまなひより読て学するは料紛
あるへし　一字の點も書そのまゝ
本に讀その文字をハ字すくなつ〇
てしは字をもよみて学ぶへし
字ことに内に讀経を物して書へしに
夜深き経の云まてハ浄瑠璃も床本の

内もつへく中つるしくゝ面　竹立なてうし
ほんるへしと仏法　石灯籠の前なりそ
うんとくへし　夜ぬ明けりて字ことも御法
つるりう　備への御を立って　是もしく
此つゝしやうし　節も皆ことゝぬかれ
備ろくへもちぬく面そかちいろりの
わさくへ　書合一体巻うろくて　飛あらし

立てふく風の候へ茶会催すの日を
たてあんどうをいろりの傍へよせかし
すぢかひに置てよし此ありまて炭を
置しひらきそくハ釜の炭ふハむしふし
席炭よりおそくむしむし更も炭わき
仕廻てを立へし揺おむ附き文
むすへしろうそくハ新しきを燃して

よしあんを切すあくてよし釜乃
炭手は茶釜よも初を焼きつけ中の
かうにて焼きあけるてもしふく風を
持む次炭を置ひ

一 右のとくぬく風をわきおませてぬと
さるより茶よりの事を置むし其い
ふくよ茶会て宗んを立て左ぅ様

右の手にて筆の墨をためてしもん
をうけてしもんを見ゆるは右うる
かけてたゞ見よ引しには
あられた太一度を見るやはへとも
心持まて紙をよく見よとて風をよく
すへ続をまんろくにいろりふちは
さしかさね押しちをひさにきへ

志りうにまつまくに川ら太よみの
よの志めにもくふ墨へしゆるみふ
り波度もあをまへしきん持ち
かきちりひろれきしるうふくは上手筆
の志めをりにかりる墨し相太の
心持まて魂をぬさ筆の墨が深に魂を
かさねて墨ちり墨がり引きにかり

ぬく風ぬるの柏わうさ立ていろのふち
こんざとも きゝて ぬく風といろて
うちのつゝ長 こゝ時あの名いろつゝの
こかへよりて 妙中をてんうんすへし
主人の此供のご紀に 忠義をつくは与かる
つゝ役主人の系といみちて 相生は
家と成らぬまでの そ記しるうよし

たれはちうくよりゝくと宗師のかまう
こみをちうくよりの 家の 繁昌まて
替こゝ振つへし 年中の時て 色 家
者は 作 めらくしまて いろ てさつに
居つへし 異国 妙 の すれまてくりし 家
和を 法色て 今 て あれる 伝ゑ く
立しはゝ 一人 も 存 て つくるこ いふに も

星おとろへきやうに志川かな海いりける
見るへし是を主人多く案すへき
すゝ。
一 衣のまへねん事をわすれおきて火
もちを立て火をひろけたゝみける
火をきりかしこにあるをよせ主火
もしに座法さすりて火をしの火と

しとを神会一座をおろして衣のね
わらきのみへはもしへつて是を
ふく面のうへのかたくてきりかさねて
衣いわりくを神主へのいろりうち
のきまとせむすびる衣をまとし
火もも衣して一座をうけつし神主
会入てうち惡し衣して座の

ぜうをおしつけるやうし　ほの灸居
中脘といふはむねといふところさして
おうぶくの内の所を極めつめてい
すじひをあふのけにして大の字なる
おうろくをもてしふ乃書合ハ
さてふくへのこまの内にてさて
白灸をゆびまてはりていかう

ろくの下にて下にある大灸を
ゆびまてはりて　同妙書へいき　ゆう
みをいしよしまて　あをしろう
よし　大灸を火気まて気をつい出
ならしゆすあるゆつくこかのすこも
火気まて気のつるひよしいかみも
第子ち大灸を一のよし　但身の

風炉の炭も直後一度宛しめし候
も無入鐶はすへし炭のすくうも
まれゆうにてれいら灰を入をまへし
炭もましく香かのこ

一 炭香法是より香合を取て座持て
かうをあけて大ろしをとりてすゝ
のこりけなきひし紙と炙へしるゆ

よらへし夏を始終香を焚ぬ
よし

一 客人も香をきゝてのち主炭へ居
なをし添へし

一 亭主は香をとへて焚しに焚ぬ
つきよりミくの風まてよりおとし
香合のしつくを志みんふくへのうちに

香合を入て棚前へうつり
棚にしまひ又座かまへの内にて置く
ねかひろくにて白炭をふく風く
入炭にもふく風ふ香合ねかひて
を立て右に持左にてふく風をもち
ふく風のうをたゝいろりへたゝいれ
又ふく風のてく置て羽箒

をもふくへ置香合せこ次に釜の
蓋をとり風のくりやりからんくやう
てしつくを立あん座かへろくをもちて
あこりに縮みへ立うり亭主ハ風炉
の炭まてりしやのうん宿てていかるかの
を附て汗口を持也釜のおきふ引さ
て居汗口を釜と私の徳のかふれさ

茶巾を取て釜の蓋の上に置杓口
の蓋を両の手にてあけあふのけり
おして釜のまへに居しきたけ置て
扨しつかに右の茶巾を釜のふちに置
杓口のうちを内のかたへむかせ置その
茶巾を左に渡し右にて杓口を持左
持たる茶巾を口の下にうけて紙ふき

ふきさし右の手に杓口を茶茶
巾にて釜の口のまはりをぬくひ
とりもぬくひて茶巾を左に渡し右
にて釜の蓋を持ちて茶巾を引あけ
のけおして取し杓口の蓋に置きて
杓口に湯ふのけあらためて右
あらし杓口を結ひへむかし湯をを

主いろりにむかひ炉中を見て炭をみ
かしこまり、釜をかけつゝ炭をみ
かはらけのかんをとりよせて火
をしにて立てかけ炭を置候
一 さてしの炭斗にて置て小座
小釜を掛して後へ出てかり
釜を掛申候 右のことく出まく

はいろりにむかひ座をすく跡をとりて
釜にかけ柄杓けいろりのちか中を跡え
柄をさてつまくさりしさらゆかにかけ
さまりかんをかけ置て 釜まくの
箒をとりてふところに入 右釜の
こりみをおとし紙園にふみつく
台扇をあらはに吹かてて上下としは

あハ大かく続けり一時ろくにつくへくせ
にやふふひつをハあまりふかさせ
うらにて油いりかて高くてあふとやけ
釜ろくにぬれきんをかさ茶いれ
の中ふ盆へし組わり相つとを
盆合羽し時に書のてくたふ有
扣くきり又新ふもみけしぬ相給ふ

の濃茶をたのみて茶入を持て御まへ
いてふくさを取出ていろ〳〵
さはりをたゝみ御まへに出して
いましく茶碗をしまりいろ〳〵さすへく
ませ。おさしるはんせうをとりてあくと
盆合しる羽へあとし御まへの濃茶
をとる事をいろはなくゑて茶碗にまいらせて

一 此てしはまつに炭をとりて前にへ
まりし童を云けるはよしゆかりし御神前
みまり浄まにあかりうつりくい御紙を
云て御しめへ出し天八竹を持むたの
手にて法さちけをかくへ右まて天八
竹を持上下のはかまさし大つさあけ
浄まをあらし云まゐらはむ事に取りて

浄りと申し日ひらりに料理らしく
下しなと中にて御しめへ立直し
一 童晩よまうしは炭を出してこまく
御しめへ立しはにし白髪老人かま前の
香たてきこりし由云けるへと都やにも
在時は老人まてるを云しはり事を
乃前夜へしきりて童など云けける乃

よしきりに湯よへ出しまていくるも
あつきしくらゐむかひかのもゑうけへし
ことに碧のあくし
一 料理は喰て箸をとりはと存知候
時中の汁さ椀けのほうを持ち候さ
椀けの下の碧り中のほうを立うけ
漆子を右の手にてあけ左手にて候さ

あけをかく右の手にて大八汁をとうり
あしふさし御飯ふところゐ入させるにて
中のほうをとりて候さあけ漆子をぬぐる
引出御飯を出まへし
一 会の入やう常のまりをかしすくなく
いまてゐうよし
一 汁は一番の汁をいちかもちくるなく後あるあり

そくいも悪し　二番の紙は常のごとし
三番の紙は　初の紙よりすこし広く
入べし
一　なかにさるとも常よりいすくなくかな
へしいつまでも緒をよりかけて　四の内を
常よりすこし細く入べし
一　上紙の内又は染なきを入出まじきを
かの紙に合て出まじき悪しきあまりの紙
をよくしるべき紙は
一　金銀の紙なりとも初に一人には二枚宛にて
よし　二なんの金銀なれど一きやく
しゆてみてよし　組わりさ
流まてらりくさんに入出するか
よし

一 酒なとも壹つあてかしらてもよし
ましめをなし〳〵二番の人へ
うらハおりくかしかるへし
一 膳を持出し時右の手にかよひ継く引さし
汁をつまとい小性の通ひ継なる
膳をおろして客の前をさけいくらも
下に置つしむ初より膳をならへて

一 居りし膳出し時ひさをおろして
膳をうけ取し膳をく法出しかりし
膳の乃湯子を直て置に膳をはくゝ
とつかやにて引出置し次第引さし
をくりし膳けて出をつかし二次第
客次の下に左膳をすけて持也
左膳右に下にお流上座の人の膳の

惣に会席なと出を以て其くに
一 汁をかへ申しかは給仕乃心得有
しゆへ給仕よりすゝむるか悪しかる
上座の人汁をかへよといはゝ切りて
汁かへまゐらし斜にしかるへし
汁の盛やうは椀の口よりうちを
三寸はかりにして内の汁乃実も

はしのやすきにしてもるかよし
但きいは又を魚等の骨なといたく
らぬものまても皆を除さしる
かよし 汁椀のふたを取て出すへし
あふりかゝ給仕して給仕の人取て返し
うし汲はいつまても同しく入てよかく
らして備よりわろ付音をして

めしを盛るをハ給仕の人まへにて持て
次の汁かへハ用なし汁をかハり候
また次の汁をくハへしるかへしさするへハ
間のひしまて給く申ハ
一 何にても嫌物あらハ一番にてをうけ
あらしにもをうけ候ものハかへハ肴
持さすふゑし

一 汁くは客間にて下座の者客次の
内を済めるハ合あらハ一番にませ
持てに給さしるに合図をきまて
菓をして猪口の物よかわりハさらに
まれくへし
一 汁かへ中前に間さいあらハ言はに
客の人よりも大持ちまへし たくへ出のハ

遅く参らは何にてもあとさへ相あらは
其ひくに言さるへし

一 客衆一座也して酒を亭主よりいたし
うけは下座の方より盃まわりしては
右のことく始をすけて出しかうし
又は亭主持出候としかして客衆斗
出しはけ候へ一つ参らせられて引也

しかるよし

一 肴の数そのほかかさね盃にさへた
まね右よ酒を持亭主かよひもうし
さいしし亭主かよひもりして小姓に
かよはせ出してよし座敷まくは
上座の人のすへにて盃まはり酒つさいは
座を為さし酒法さまし暮いものや

酒のまし悪し酒ほとさかに入而てを
あしくは
一 酒出ふりは何れも自分まて出し
さしは何もりさいとも自盃たとく
主に主人よりといふとも自分の
かまへし
一 酒一座出して貴を出し下中は

主時亭主取出かんを否候しこしと
中ニ而引足又亭主持出亭主
しやくにて志いへし但三座んより
上を酒ひへうしは何も三座んより
うへを言へうしすは口切初て十月
あなかてほりし何の香のりろへと
聖てもよし何もさしまはらうよし

さ時も宜しく候は主人中入あり
行燈を亭主へ渡し下おさまりよきに御
しかるよし
一 湯次とりし其ミ角ミしすれ手桶取ル
湯つぎをのせこかしろうをそへゆし
柄を湯次とおかしを左上に置
て杓釜まで蓋を左にてもよし

釜まへより杓取引きとらりしかも
柄しし つぎを右は置て 蓋をの
清ろをとり湯を右仕置てを時もて
仕置て亭主取出蓋をとて中は
水かきは湯をのては時柄の内茶を入
飲ましきてまへのとく柄も置も
ちらへさらゆるに釜へ一 亭主

並たる膳をちかへらるへハ亭主とも
ごくふ似たるゆへなり肴なとも替ハ
かちまわさせせハ膳をふちまわさせ
うしろハ下へおろして亭主よりは亭主を
膳こりまて御いりえく膳しのて汁を
かしらをさけ礼あるへし　又
膳をわたしハ膳をいくし汲ても

あつかひにても亭主も汁の後を吸さ
礼をしてさまいまゐるよし

右中へハ

一　膳出ハ出よりも膳の時膳子をさて
へつり納菓なりしをせはへし

一　菓子菓子らるの室たる菓子をとてハ
あつかひ亭のしても清ふなり

但いつまでの儀なりとも一つ二つ程有
紙にしきんしつかのをおさへむしりいく
両しても入やうしをそくふちぢうなの
程むきつまかさねてむしりあまし
人もむりしむきつまきていあふなく
此皆二ツ三ツ二度ほどむしりてよし
主人ならば中入以時も主人御前斗り

先むし此ほむきつまかさねてむし
しかるよし　一色乃菓子をふる
しらひ一ツ宛而しまたて出しなく
むろうさ菓子の後一つに飯しかうよし
をおは中やうじも何程なるの数一つ
ふしてむしまいらし
一　やうじいろうわじしなて飯つもさい

六すかとかしてよし　むねさ

一 ゆるしなり

一 会席すみて炭おさまりて　さくみて
ぬるしをもしみて　亭主炭を持
いて　おくに置し　客も炭をかねは
ぬるしをたくとて　ふちたち　おもあ
のつりさかさ○　汗わきへなをしくて

炭をつくろふよし

一 会席おはり炭ぬるしをもしみて
亭主も　羽箒へいてあなたうらせ
手水なと　入させ　ぬしやくをよく置
会席の後もちろくさかさ○つんつく
ろうて（いれ）たいすへし　手ぬ入い
はみあかりあやうに　入相なかりとく

申りま升へし
一 あらためしたへ仕廻りかへし入
きまいらせそうらふしていつまてつかへ
かさね 御ものにのかりのまゝ権かなる所の
所わさに 常にてけり見ぬ事あり 但し人之人の
一 御借まりて 所帯乃ごらし入下と
のかかさねへうしる 御浪没より事る

御目へ同ゆるをゆるして よる所
立へし 夜前のまゝいるまいり在て
よりもしもさるのにるを付そなら
ちかきへまり 出てもよし 但下在の人
旅まかりいるい在ぬるちり申すとあらは
こらり又は 達するとあけ売りり
事てねて出る後ますとる下在の人は

許すもさるへし

一　主人御膳の時主人よりせんへいせよといふとも
さりとてつゝしむへし　膳掛ては
御膳の前をひらきけの肉のふみ石
のよう清しひらく箸へし椀を
とりて父御へいひせさせてふさ
それへよくあつかりてかしこまりて

箸へし食器をおへつゝしん箸
箸にはあまりはいつれも食を残
椀をとけ箸とるへし又うこ
にかりきるは時々水を呑く呑
うひて亭主の菜肉を伝へきよし
さるへしつい水のふいあしらいて
取出しもちへし　大切時もかも

あしくは茶の色もあしく見へ申候
いそかしくなきかよし
一 棗は袋をいかにも清よのきれいしやう
にたゝみ置てしたゝりなくてさ
ほこりあけのはらひめてほこりあけ初め
ましてもつしかてりて一服ゝは
して湯を服ち清ませへし 茶碗
茶入のふくろあしはうりて扣ふくこ
ぶらさげのある衣しさのそてうつり衣
おこさ仕出ていしつかうこの中ものしをと
あけて柄杓を汀よりけ二季下に蓋
置き直て柄茶碗をかうこの柄の
茶巾一つ置そを下ろして茶巾をのをしを置て
陰子を立てあふこりし 斗りをかちて

焚手へ返へし　何にてもなりしを
ひとつくへし　なりしを総中万事所に
すへ物たつきの乃まへにて障子をを
あけてみさしをおみへ引出して
香を出　焼手の方の内のいろふたを
かきせけれは色もしぬものを流させ
香をしまて　右のことく香中にたてとし

の合かしは　一枝の戸をものにて路
出かりしにまへし　香を初すへし　然
それへし　此時はすへし然るも　障る
をもそれつし　障子まへし　但　風炉
のさくさいまにしてもまして障子をまても
香へし　風炉へは風炉の内かさ立中にして
一　床は初掛物またらいし　此時は花をいけ

一 但主人ゟ又ハ数寄の印有
客は中へ入りし花入斗香合松乃
盆折ニ也を入茶巾小刀など床ニ
香合しかまはし 香合しるす 別書
ニあり
一 炉中火加減よろしく火を入候べ
炭斗にても 御客にても 直べし

いつまでも香合ニ香を入客乃内
はほてりし 亭主大切香をかちら
はりとにけちきりし かのの茶ニ
相伴加様こへ中程ニ折しこさ
くりをさし 引こむべし
一 客をねかるゝ礼をして客をまひ
あらし亭主盃しるやうに 柄杓で

置て入亀し　次よ同茶碗よ入茶は
をそろへ　茶のごとく　まかして置へし
客人作法の時も亭主へは入ばかりに
すみをはらひのかよし　亭主とひとく
遣ふへくれは本茶の亭主なりかへりの
ことにても礼て可有く
一　床の花をみるへく　茶立て置へく　所は時

次の人くゞりを入ゆかよし　右なく
くつはせりしくは床の花あかりさゝ
寄て見へきくれは右はちく可能様よ
居てちんそ行より　茶立て置へく　いかよ
もしろくはなし　おとるまく　なさき
やう可　ゆ知て　茶会無法可
見つしりうきあらく八志やうしもと

志川ふあけて内の座合をつたく
隠すへし御上所の樽をおん又
御中へ参て下臈の所わきへよりて
居へし御くし日御御もつん仕て
上臈よりもち参るへし中臈出時と
茶時と上臈御とん臈出御の中臈
の時を御りやうの上臈に居て茶の

時を右の上臈を間をくりて茶碗
さし出されとも喜くは臈出されは
居るへてよし
一　茶をのを入よりて茶をつけおもんとし
持りるをそうりて引出御茶を出
下中臈と居てしは茶を出候よし
中くものこし

一亭主の見えてゝりく亭主茶立候
所也臨時正に茶を飲かんよくし
を入ることもかんしるもよし
一あふかしにめんつうあるはとちめを
認見候而めすくあるしして茶釜を
あふかしに入むしやくをみせう
あふかしのうちに湯しだの口

ふの茶かしを持て出茶会候ての
障子をそへていろりのまへり結居
おりて先釜わくるを見えてよし
柄勺しきを置付いろりそう
をろくふしてたの手ひみゆまて
むしやく此柄のかしを湯まくお
まて右へかへしあとのけふるし

右の手にて振り右のひさねよミ杉
又たゝみてふく面をゆひ与まてこり
柳枝柱なりし左の書面をゆひ添り
まて柳枝ニ柱をへ左ニて柳枝を
右なりしニはためをそろへ柳枝の節
を柱左の縁をよ并て日のこうと組
柳枝乃柳のさきをそ縁ままへひさく

のこうを縁乃ゆんと同しことり所
柱てゝし縁よりさきへいてしうち
悪し柄石乃日の書面をすくふ
至合は切なれは竹の間をあの
すつなし左のとさくをゆまて右へ
清記よしよりかを握りて書至
乃ときあとのけみて紅くなり

さ時ある人へのろくに置なをりつとや
へし あるは亭主もろくにゆるさつて
主は様をして 末座なくは客を
様をかへて居へし 亭主陪に
ある人ありて ある陪しる人ありてゆりく
行もさ陪しるはよし 子細をるゝ也
亭主も陪主人なりとも様をかへ

へしにいは茶碗をたゝみてむ 右に
渡し右にて茶碗をよく持たせは
そとに陪して下る也 右にて茶入を
右衽のまゝへし 茶碗との前蓋の
ゆりて一也もひらにゆて左にて茶
へをさく/\ うつし続の井ときを人
さしゆひて高ゆひの前すたさゝ

右手てふくさをゆひ二つにて持まゝ
両にさしぬゆびをふくさの中に入て
ひさしゆひと右の高ゆひとくすしゆひ
の間にふくさをはさみ緒を左の
手にてめくらもし茶入をとりく
一　袋の口をのし　扨右の
手にてふくろを指左の口のたる

にのせおさめの緒のちんを左の大指
のはらにはさみあるやうに指右のゆひ
三つにて茶入を持て袋よりぬきさ
せし其時取つ時指を添へ指我緒の
前書有一重袋をはいかにも着ふり
又ゆのみ指の打ちもかけやゝ打に
かけやゝ時を扨へ出る緒を右のゆひ

二つまて置　四つふしていふる茶の方を
ちしらの寸よちうして紐よけいり
おもすくにかりらやうにをとして
掛置かり又紐よ置ゝ時を西へむくる
緒を右の緒ハ右まて左へおりくへし
左へむしろ緒ハ左まておりくへし　紐
つ白むさ妹緒しき時まてもち

袋乃そこをまへになして紐のうき
わ緒へたくうり次よ緒よはさみ
しるふくさ緒を右まて右あこかしの
よまてそとぬりれそく紐右よ持茶入を
左まて置　志かしくぬくつしふくさ
やりハ定まりれ茶入をふくさ　仕廻
ありて茶入の表をつつみて紐左あて

置合へし　客の方へ茶入の正面を
むけるやうにし　右乃手ニてふくさ縮
を取り　左の手へ添し　右ニて　茶杓乃
ふしのところより　ゆひ三ツめてうしろあふ
のけて　捨しよりさきを　ふくさ手の
内ニて　打ち返しかいのさきを
ふきて　又ふしよりまへをふきさ

さ湯杓さきへ拭きいしし　右乃
手ニて　又ふしぬいさりを　横三ツ
めて　指葉入乃蓋乃上ニかさせかけて
杓くるり掬左手指しかふくさきぬき
右のてニ添し　右乃そく　脇ニささミ
さしまして　茶せんをゆひニてあき同
の通りを右　左の手　ぬるいにてさりに

のせたるをぬくひ取り出し柄杓をかまへ
つゝ茶入の袋へ右にて置合あり
茶巾右の手に取てはさみ蓋の上
中に置へし　柄杓なるとハふくさめて置も
よし　以上右にて　柄杓を左へ渡し茶の
ごとく持釜のふたをゆひ　二ツ折て左
へし　あはせふくさ絹をあてゝ右

へし　蓋を右にとんをさけて左りくを
渡し　釜の上にてすくふ也し
蓋置の左中に置へし　柄杓へより
かけ　茶碗をあらしいてよし
一　柄杓右の手に取　茶わし湯を汲み
元さくのふしを言ひのこに置て
人さし指の腹の当りにてたゝえ大指

のちにしてさらさくはおきへたとへは
手の内に玉子を握りしるやうにふし
しの字くるしきやうに持て湯を
汲みり湯を釜の底を汲くるう
よし柄杓まかぬきてからあしくは
きかぬ様にやうにし汲むるよし柄
柄杓の柄釜はにふあてしさるやうに

せし入まへし次に湯を茶碗へ入
之さく柄杓のまゝ釜ほうによりかけ置
右のてにて茶碗をもち左へ渡し向を
持右の手にて茶碗の正面しをぬくひ
列左の手にかく持左をとくへ茶の前に
置又湯を汲茶碗へ入柄杓左へ
渡し茶のごとく持右にて釜のふたをしめ

まへのてくさくを右ニ渡しふさ
おさめよふに致へし
一 茶せん右乃指三ツまても四ツまても指
茶碗ニ入茶せんを横ニふして茶碗ニ
かゝせ三ツ返し茶せんのさきふあて
おとしてまつ茶碗ニて茶巾を
左四ツめすみを引のへ右をとをして

左へ返しせゝきかつをはさみかし
中ゆひはさみかしやうい西乃高指ア
茶巾をかゝせ高指のよふて茶巾を
へさしゆひと大指にてはさみてのし
中ゆひ四さゝと角をみて引のへ中を
左のゆひ三ツ目て四ツに折又右
みて又中をおりて又中をおりかへし

ふつくらとして右手にてゐさしの上に
置て茶碗并茶巾の茶せんを横三ツ
ヌても置りみても持て志つくをふりて
茶碗のそこへ中さあけゆひ三ツみて
持様りゆひをそへて茶入より左のま
ヌ...へて置し飲合別書にあり
次に茶碗を右手にて左へ渡し右手にて

茶巾をもちて湯をすて志川く茶巾にて
すけ茶碗茶巾を茶碗へ入茶巾の
端をつかし茶碗のそこへわけて
ゆひをふり入りとのへてゆひのおれめ
やうに二ツ三ツかとしてそこて折かける茶
巾を茶碗の中へ五四ツ茶碗のまはりを
一ツ二ツかと始め茶碗茶巾を茶

碗の中に置なから右の手にて茶巾を
かたちたゝみて下に置柄杓茶巾をおすへて
しを右の方へて三段左のてにたゝみて
かけかへりてあさしぬるき置様の
まゝて茶杓をゆひ三つにて茶杓の
ふしのあたりをとりて茶入をたゝて右
茶杓かちれうら茶入のふたをゆひ

こゝろまてあけ茶巾ひさくの柄のたんに
かさねかけても置し又夏は置こと
置もよしいかく茶入のふたは茶碗
よりはも右のすみに置なり捌茶巾を
茶碗のうちへ落せ茶をすくふしとすくひ
二三度まて一度にも茶をかさなせ茶碗大小の
加減をかんしてよくかくいへし此茶杓に

茶せんにて茶碗のうちをまはしてあらひおと
してすゝき茶杓をあらひ始にして
茶碗のふちに置すくみかけて茶入の
口をゆびにてぬくひふくさをもつは
なつめふたの法やうい右附て法すみ
まさりとんとしてと云書をあつかふ
おなし ひろすみをあたへ時 伝事有

人さしゆびを拭てあとし中は指先のぬくへく
たの手にて本式にはしたる茶碗の内お
茶をとらく茶杓をまてらくさゝろけて
又茶杓に茶せんし右のことくたゝさ
たしして右に渡し右まてらくさゆ
を右茶杓と右之ふくさゆをたて右
右に茶杓をかちていたりをぬく

いてこを取右にて茶杓のふくしぬきり
を持茶入よりかゝせ掛て蓋よりかり杓の
茶入にてふりて茶杓に茶をぬらひ
してこちやうあふのけふして蓋の上に
置し茶杓ぬふしをふくさの中より
おもへ出して置こ

一 右のふくさ中を左手に持ちてかさねとく
右乃ゆひにて記さくをとり左に渡し
ふくさ中と右へつゝふくさ中にて
釜乃ふたを取りて右にかけ蓋置の
上に置記さくを右に渡し右のごとく
持てよさ柄杓湯を汲茶碗ニ
いれこれを記さく釜にかけて置
いれよ茶せんをとり一通ちやく

両りみの指にてふ川くりと指
さやくふりてはいつまく指をのへ
志川かふ茶せんぬそこをふりくかへし
ましさるやうよつり立又ゆひ三にて
茶せんをかち茶せん乃穂さきまく
あつをわさくちこさよせて一返り
はりして志中りて茶せんをぬくさ

よ茶乃前に置合替しすをのしうさ
茶碗を持て茶へさしむしやうに茶
碗のおかてのかうを茶人の方へ向し
て下に置へし 拘のしやくを右にて
右右へ流し 右にて釜の蓋を志め
ふくさうけて置へし のさくはちを
ゐこぼししゆゑにすくに置へし はゐを

ふさくめころをあさかしめおうに
かけへされこほしさる湯のいき柄
杓を入くあしさいゆへはんとなつして
ふせて置へし又ふさくハ棚斗
置てふくさふたあこかしめ緒は
たくもよしめしすゝきの切茶釜
ふたまてあ人釜のつきの中に

間二間なと月かけて置へし茶釜
を目当りし候の前へ寄て置へし
かまえりて居へし
一
上座の客亭主茶せんを取りは間に
礼をなしてまへかし緒をくみて
居へし此時ふくさを立茶碗をさし
出すを持て居へし茶を立とりく

茶碗置ある所を見合て上座の人
茶碗を請とりていたゝきて三口半と
呑て乃ミ口を指にてぬくひ扨又いた
たゝきて次の人に下にをきて渡し
次しのこやう同様にさくかしおきて
のむへきなれとも清け如候すてひ
主人此ご清の時を呑て詞をいたゝく

呑しまひたる人にて茶碗を持て出
よりゑくは亭主へて渡れとやらうる
しておの湯を少し入て時に下
に作らりて上へしむ茶いたゝき此主
茶碗も見合して上座之主下の座
ゆくらりて亭主へ下座よりも
渡して主人茶碗を渋次らて

下ゟへ入中へしと所望られ候とも又
へし入やう何迄も同し事なるへし
末客の方亭主あるハ上座よりも
二三番目よりもちと亭主へ寄候へし
給ふし　亡中亭主とあしらい候へし
なとくやもよし　下座まて客仕廻
以後茶いきをせす茶碗をつんて渡し

渡すへし　但上座の人次第の人ならハ
下座の客納ていきをもせす茶碗
をもつんて上座へ渡へし　上座の人
いきをせす茶碗をつんて次へ渡し
又やうしを客の服を専に拭て
ふきさく拭ていきをせすて茶碗の内
おをよく入て客ひちをあけて

いたきて跡へ渡ましし下座の
人又仕廻りて上座へ渡ましし
上座の人より茶碗を亭主へ
かへし申さはかへし申時太主を
亭主取りし亭主へし茶碗の
おかてと覚し地方亭主を也し
いつかりしして亭主へし又

亭主の前まて呑納りて上座
の人より茶碗をとりて太の
ことくつゝんで跡へ出しは又
上座より亭主へ茶碗を出し
後座茶の時も呑仕廻りし人の
方より茶碗をくふ返しやう
一 名物の茶碗かへしはそれをかへして

うしろへ引て仕よせにてつかすふかへす
もあり然れともさしつかへ候
一茶碗つかひしまはうちより右にて蓋置
をとり柄杓とのこし右の所へ置合
たまてふくさを置右え渡し
蓋置の上ニ置て茶碗のうへ
湯を汲つかし亭主茶碗を請取

手なつま置時右左一同に取と
柄杓を中へつかし手ニ取候也
ありてつらく柄杓ありへし柄杓ま
あろくにのうたゆつしてやゆ茶碗ニ
徳をらくらく又ろくに渡へし柄
ふくさを右まて左へ渡し右にて
管乃ふくさを置て湯をたんふとらさ

茶碗ニ入ちさくいてき釜ニふりかけて
居右ニて茶碗を正面左のゆのそばに
いる茶碗をの也右乃人さし指にて茶碗
ニ付たる茶をおとして湯をきてさつ
くと右乃ゆびにてさけて別茶のゆ
にして下におきてうすくて茶気と能
て中茶の事ニ茶乃濃茶入しり先の細

ろつとり中ぬくしう事ニ候茶とやわらけて細
てけれハ但客人の濃茶之人多くてうり
ハ濃もうすく成るゆうそく立てやわらかにて
立るかよし　たとへ主人よりも濃茶
を立て中気といふ中ぬくし

一 薄茶をうすくして細かりしあさしのと
に置しる茶巾をとり釜のふたの

上下居をもにて水さしめ音指
二つ有て中弦を為持つゆひをいの
へて表を〱まゐこゐしめ上まて
指こしたの大指をうつまなして
うらめをしをたまて中弦を〱
むけて寂をわたし太の弦をたまて
中弦をうりて立てけやいは中弦みを

たてかしてまでの弦をまふかすらさは
ちりにかへりたてけやいは柱さ而いお
さしの座り如弦とし引去まゐりね
柱枝のふしより下を右まて揺り
答め為左の人さ手ふしよりもを指
左りまて指太のこしらりかをゐゐを
限も心をく如ゐうを為せて人の如

けをたゝみしと後茶碗に入ていさく
蓋に引かけて置茶筅を取茶
せんを茶碗の左へかゝせ二ツ三ツ
雅折ふしふりふしとふりて茶碗の
ちゝく茶筅を引かけて実にけゝ
右の手へ置合右の手にて茶碗を
主左へ渡して右にて茶巾をとり

てがし茶碗の内をとおし清め茶巾
にて拭右の手にて茶碗を下に
置茶巾をたゝみて向へ折なかしかゝる
折て別茶碗に入茶せんを取て
とり茶巾の上にて置てふるきなとを
右の手に茶杓を取て主に渡しみけ
ふしより先をふきて又へ行ぬる

直してふくさの折りを茶碗のうへ
よこ川むけて ちいさく小口へし 拭
ふくさ腰をこしにさしき 右にて
茶入を取て 茶筅乃あとにをとし
茶碗を右に置 左にて渡し 茶入の根
まへのごとく 蓋合ひを渡させて 左川
ふたをとりて 茶入ゆるかして 右にて

をさし 茶碗之川をゝいて左にて請
中ゆびと 二つの間に柄の入るを悪し
茶立仕舞ての 蓋合ハあやかり蓋を
不入ように 大かしらにとくし 次第
ふたをとくそれのごとく 右手をとし の
を釜に 二度程さして 湯を くみ
やすめて 左さくそう川むけて 釜の縁へ

かへせて持かへし露を釜へおとして
釣柄を握りて左へ落し釜蓋
ふたを志めん又ひさくを右手に渡し
ふた置乃上に右のてにて置左の手にて
あさしの蓋を右のてとく立て右手
にしふのをくめぐりふたを志めん
柄杓ほうみを此時も持上あさくし

他あまりを捨手にせにちかくけてを
まし ひさくをとり手に薄茶をあけて後
ひさくを持かへし蓋置を指にはさみて
置てく あこぼしに左手持て立直し
戻り茶入茶碗を右手寄せ置きしろ
又れあよりに茶入を入れふくさをはらひ
あさしの蓋をふたくは時茶入を取ても

よし又名物茶入つけて立申候

茶入をくゆるゆり立時ニ茶入を

右て引返し候袋へ出しまいて中へ納し

置事ハ何時も茶入をつね置申時ニ茶

入を右の手ニて右ニ袋を扱ふくさ

袋を左ニ出し茶入左手ニ持ふくさ衣右

ニ持そへ茶入のふたを取て置のき

ニ置茶入の口をふくさて蓋をしめ

て扱ふく乃とそうやうをふくさてふくさ

袋を膝ニ納候て扱茶入の

わかてとおさしきうらを左のうしろへ

をして右の手ニて左脇の右ハ

引きまわり

一 茶入ハんやうのあはれのしぶいきを

のなきより両の肱を膝に付け腰を
さけてうけ茶入の面を見しるも
蓋前を見て居へし亭主より客に
客に従ふへしとやさしく客より亭主へうつる
亭主も客の口よりはかりかかりて
従ふへしやかのこと時宜の人
東客よ時宜をする所にて其茶入

きいへよりたの口めくりをたゝみよ
右て右の手にて茶入を左いつみも
左さくかちて右の口のそくへのせ
そらしてさりてたいをつみて引
右手て蓋を取て蓋のちりやう
をつみて左ふさいを其客すもはり
茶入まるへし常のとうりまそ

糾要乃上よいつ事も志つ事おくへし
扨茶入の口日つかさのてい茶の
おりまるていをつんて茶もすくふく
みへしりし茶入をおしかくふけて
花こたくりをも見へし扨茶入を
持りして見ゆてうき右のとし客
をりして いつれも誠くまふさをして

茶入乃おすてのすを人のおよすして
次へかまへし 次へかしいをれも
茶入をたかく持まわつきんいつれも
白ゐくよ持て要よ逆くて後まくし
次のつえやう日記なり

一 下座の人茶入を見おもてして上座へ
かくへし 上座の人請言て又つる

袱をして茶入のわけてさ拭ぅ
蓋をなして右ニ亭主置しるやうに
同様ニ置へし
一　亭主も客の茶入をおかんするハ茶碗
を持て立膝になるへし又ふくさを
客の手にとく持給ふへし御台ゆ
とめ川て客さしぬきあとをぬくひ

行ひを茶巾ニて拭ふへしとて茶碗を
出て立へし此時客より炭を所
望ニ於ては
一　客人より茶入又仕出てかへさ候
時ハ以前之左の手にて口の邊を
見合て茶巾ニ大事ニたくことニ左右
入仕出て時かよくい亭主をまく

持出て茶碗と引合に置合よろしくは
又茶入を御よくよくと拝へし
一濃茶を立けてうす茶を引つけたの
茶すて立ならしこい茶の法をとる
茶わんをませき又湯を入茶せんを
すゝぎて右のことく茶わんをふきて
納て茶巾を釜乃蓋にのせおきて

茶を入茶杓を茶入にもたせかけて
ことるにをく茶椀の蓋を取て右の
取よりてうすをかい立かけて白湯を入茶を
頂きたるやこしうすを茶を二度ならし湯入置し
立申して濃茶のことし 但釜にのせて
志らんそは又茶せんにてやりさくし
しとありて茶碗のことく茶せんを

ひかけて置也すこしいかふも右つゞり
湯ハへし　又水不出様ニ
一　茶入をかへりて濃茶別の茶たて
立り〳〵初め濃茶済候茶杓を
一度すゝきて茶はりて茶杓を立て
茶碗の上布巾にて置て茶筅立て
茶入を出右ニ添し右の手ニ持て立

猶よく〳〵入候濃茶をすゝめ候とも
中押ても入替也右の所ニ取て
濃茶をも手ニ置ふくさ取を右也し
て右のをくふくさて茶入置右ニ
置て茶杓をすゝめ上ニ添し
て置返しかいを方ふのけ置て
置かり居文湯ニて茶碗をすゝぎ

て右のことく立かへ茶杓にて茶掬り
茶碗へ入れて手おろして立
まし ぬるく候はゝ 置くへし 茶碗の上ニ
置て茶杓を何時もぬくひ ふくさにて茶
立也 よりて座上の人 請取て飲へく
時宜あるへし 上座又客初めるとも
よし 一服三人まても二人まて一服

まりとも飲し 後中茶を呑へし
茶碗を呑納る人の方より座之
くしよろしまよふし 直くらりし 亭主人
主に取てよし 客人手前にしかまて
立置し 客を統すまして 小納
つくや あかり

一 席茶門付候て湯を炭取直し 好みのまゝ 多く

少ゝ茶過して不足ではうすきも
あたりやはらかなるべし但炭店のうちへ
湯をなるやうに下火入てよし
亭主炭つくべし
一 茶過して炭の直しやう別段之とは
但茶すきへ水炭よりは慎く重かるべし
かくも炉の内も炭すくなく仕へし
茶を上いろりの釜をおろしてから炭
右のごとくよりて炉中を直すべし
そこにて炭座は敷也取ても又
よりの不足ではうすきは炭茶いきよし
立てかりしあまり炭を置るはあし
茶は早くしいたいもよきはいたるべし
炭を置てしよりかりてちかんて火

もし庭石をそへて枝ないろりの
すの角ぬのちにおよせよせても
炭着みて大きさるか松さをか大きさ
ちんさへ入こやすき炭を庭石まですもい
居まて落さるやうまちんるへ入相火
ちしし庭石を組こしちんとこの上有
松さきて居あかりし続くよくもし相一所を

いかみもさきいまあ御し炭乃せう
あこさやうふして短しと炭をさへし
足やう仕良やう右乃をし此時ま客
まふ炉くまも二度は

一 風炉みて茶さりて此炭正面に仕
かのこし

一 右ま済茶半まて統りし炭主仕也

して引付に置く立へし たてこの
茶碗を右のてにて取りしふくさを
御手にて出し柄杓をとりて廻りを
さゝへて釜のこの蓋やうしをあけ
あつしを出し右乃手に茶合湯を
を立御手にて立て右の茶碗あらひかへ
此度を茶巾ぬくひとりてたゝみ茶碗の

中に置きてさて上に茶せんをのせて
置へし左の手に茶碗右の手に茶わんもち
出やうに茶入を茶碗の廻りかさゝへ
出し持へし 同し廻りに持ての
置し 下に置く時も 右持斗りに
茶せんのところに置てよし 此人持に
して 茶合 柄杓ことはしを 展ちよう

棚の上へ手を出し置て右のごとく釜
合たうこの障子をあけて柄杓を置
水さしかたちなをりて蓋置を置て右と
置くまへのごとく立へし但客より
茶碗あらため持出立は薄茶の時又ハ
早ク立薄茶一服ハ立時茶巾のをり
こい茶の時をかへさし其上ニ茶巾を

ハ主の好次第薄茶の時ニ茶巾はさゝし
して又こま茶碗の内へ入置て蓋乃
蓋を置て上さしたて持たし茶巾を
ありて右釜の蓋を上に置て立は
はの替りのあるくは
一 薄茶は点り右のごとく棚へ
也し 炭も仕立てかけ亭主取出して

おゐして待合へ出らるゝとやあるに
ハくさむこそてきちかいよ田てし
とて杉戸より亭主ハ帳をはらひて
亭主も待合へ入るへしあいさつして
床飾を見其後茶席のうちなとも見
それより出へし客座へつゐて刀
よりまわりてありつきいろいろしうるさい

あの床飾をも刀をさし中くゝる
りて露地へ出飾るへしあるいハ露地を
かたよりして亭主をまちうけへし
亭主をかへしまして床をしたゝめて
おもてにて膳あるへし亭主礼の義
挨こゝまて当国のよし納米中
へし

一 杉弓仕立にても御焼かしもえ折改
しめて置へし 其余不宜候手ハ
すかすへからす
一 鹿子のくすみのるゝ左絡をよしいて
ましさ間のるゝ引さく之此引さくを
立とて尾のおしうき中段の間
紙とるゝいるり日あくし

一 上書をあこかしを右まて置左ありく
渡し紙左の絡のかたに置へし
ひきふしより直ちあこかしせうるゝ
よし 但ちさき物をひきの先にて
おさしるゝもよし
一 二番を引さく右まて右ためし置
置をも右まて右あこかしと極との百

まりふさきへ寄て置へし重てより
し　二月三月頃を置へし　組置の
ふくさ　大小ともに入あるへし　ふかく
はりえさのやうにもつへし

一　三番に茶碗を左にて置　右にて茶
入をとり　一度に置よりおろし　ふ
さし此余に置合中にあり

一　四番にふくさ袋を置へし　板を左にて
こしへ右にてふくさ袋をとくへし
引緒にてまきとむ

一　五番に茶碗を左にて置　袖まへにし
置さし置に右の〇をうけて下に置
へし

一　六番に茶入を右にて置　袋に入にて

常のごとく出御して装束ハ板乃所
ゆきふ面へし 右乃ごとく茶盛ぶ
さして ねさし乃まへ茶碗のあたく
たてへし 蓋置乃蓋りを取りして
置しかうまし

一 七番目 茶さく 常のごとし

一 八番目 茶碗 茶入よりおおきくすし

かへて置へし 蓋おきとこりあつかさる
やうにとの事なり

一 九番目 茶巾 右のごとくねさし 此上
ニ清茶碗ハ たてへし 清茶碗ハ
茶わんニ入置へし 此外 清めの
盆茶入 ね 若し尻ひ ねさし 此蓋
を風炉の左此組板の上より 然

みかきをうけて茶せんとほし茶碗の
上にふれさい茶ふのけくかひさ
よくふきして置へし
一 茶碗のやうの事右のとし 但茶をたて
茶入茶碗右のとくかさしのまゝ
置てかさし於蓋を志めとさく
かへ置きかけ茶てかさし於蓋を

志めて あかさうるを右にて左にかへ
置し蓋をさし右にて左右のとく
いつの上にし置て置かへ置にてとさく
茶さし かさくわうして茶入の茶碗を
右のとく持て 扨ち右のとく置て
茶杓ふくさ茶を右のとくゆひ付
てかこかしを持て立あかり捨て

右のごとく扇子へ置合中なり

一 薄茶斗り立やうのとの右手わかりて

すハ左へ寄りし茶入茶碗をならし

跡おもおき合せしてすくに茶杓右手

座之下に置ハ時茶入をおろし茶碗

よりおもよしくとるかよし茶入を

茶碗の間に右乃入る事悪し 但

右まて茶入をよりしまて ふくさにて拭

さしおき重ねへし 此外右のごとし

一 風炉を扇子の手前におき而る場ハ

年　月